

主な出展リスト

- ◆ アンティークプリント/マリー・タリオニ/『ラ・シルフィード』/画:アルフレッド・エドワード・シャロン/イギリス/1845年(AP-202)
- ◆ アンティークプリント/カルロッタ・グリジ/『ジゼル』/画:ジョン・ブランダード/1840年代(AP-215)
- ◆ 写真(署名入り)/アンナ・バヴロワ/『瀕死の白鳥』/1910~1920年代(PH-D-196-07ws)
- ◆ 写真/ワツラフ・ニジンスキー/『薔薇の精』/1911年(PH-D-185-06)
- ◆ 写真/ワツラフ・ニジンスキー/『ペトルーシュカ』/1916年(PH-D-185-02)
- ◆ 限定書籍/『ワツラフ・ニジンスキー:黒・白・金で彩られた作品の芸術的解釈』/画:ロベルト・モンテネグロ/イギリス/1913年(AB-19)
- ◆ 限定書籍/『ロシア・バレエからの研究』/撮影:エミール・オットー・ホッペ/イギリス/1913年(AB-20)

山岸凉子作品

- ◆ 山岸凉子/『アラベスク』完全版 全4巻/KADOKAWA/2010年
第1部第1巻:完全版I/第1部第2巻:完全版II/
第2部第1巻:完全版III/第2部第2巻:完全版IV
(初出:第1部『りぼん』/集英社/1971年10月号~1973年4月号
第2部『花とゆめ』/白泉社/1974年創刊号~1975年22号)
- ◆ 山岸凉子/『ヴェリ』/KADOKAWA/2007年
(初出:『ダ・ヴィンチ』/KADOKAWA/2007年1月号~9月号)
- ◆ 山岸凉子/『牧神の午後』/KADOKAWA/2008年
(初出:『ぶ〜け』/集英社/1989年11月号~12月号)

主な参考文献・資料

- ◆ 『バレエ・マンガ~永遠なる美しさ~』/京都国際マンガミュージアム編/太田出版/2013年
- ◆ 『バレエ千一夜』/薄井憲二/新書館/1993年
- ◆ 『兵庫県立芸術文化センター薄井憲二バレエ・コレクション目録 第3巻 アンティークプリント・手紙・サイン・切手他』/総監修:薄井憲二 監修:芳賀直子/兵庫県・兵庫県立芸術文化センター/2014年

協力

- ◆ 株式会社KADOKAWA
- ◆ 公益財団法人江東区文化コミュニティ財団 江東区森下文化センター
(本企画展と同時開催:2023年秋の特別企画展『山岸凉子のバレエ・マンガでたどるバレエの美』2023年9月10日~10月9日)

山岸凉子(やまぎし・りょうこ)

1947年9月24日、北海道上砂川町生まれ。1969年、マンガ家デビュー。同年に上京し、1971年より連載された『アラベスク』で一躍人気作家に。以降は、バレエ以外にも、神話やホラー、エッセイなど幅広いジャンルに挑戦し、独自の作品世界を展開している。1983年、『日出処の天子』で第7回講談社漫画賞受賞。2007年、『テレビシコーラ/舞姫』で第11回手塚治虫文化賞マンガ大賞受賞。

Kenji Usui Ballet Collection

Ballet Manga

~ Ryoko Yamagishi meets
Kenji Usui Ballet Collection ~

2023/9/12(Tue.)~2023/10/15(Sun.)

(休館日はwebでご確認ください)

◎ 企画・監修

関典子(薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

Noriko Seki (Curator of Kenji Usui Ballet Collection)

舞踊家・振付家・舞踊研究者。幼少よりクラシックバレエを学び、18歳でコンテンポラリーダンスに転向。お茶の水女子大学大学院博士後期課程を経て、現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授。日本ダンス評論賞・兵庫県芸術奨励賞・神戸市文化奨励賞など受賞。

アシスタント:若林絵美(Emi Wakabayashi) 後藤俊星(Shunsei Goto)

兵庫県立芸術文化センター 薄井憲二バレエ・コレクション 担当

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22 tel:0798-68-0223 (代表) fax:0798-68-0212



Kenji Usui Ballet Collection

薄井憲二バレエ・コレクション
2023企画展

バレエを描いたマンガ

~ 山岸凉子作品 meets
薄井憲二バレエ・コレクション ~

2023/9/12(Tue.)~2023/10/15(Sun.)

マンガを通して、バレエの魅力に触れたという方も多いのではないのでしょうか?日本においてバレエ・マンガが果たした役割は大きく、観客とダンサー、両方の種をまいたともいわれます。

そんなバレエ・マンガの世界に革新をもたらしたのが、山岸凉子氏です。1971年に連載が開始された『アラベスク』は、それまでの少女マンガの可愛い絵柄やスポーツ根性的な物語とは一線を画し、本格的なバレエを描き出したエポックメイキングな作品。その考証には、当時の公演プログラムなどに掲載された薄井憲二氏の解説が役立ったといえます。

例えば、『ラ・シルフィード』、『ジゼル』、『薔薇の精』などの絵柄においては、歴史的な資料との整合性に驚かされると共に、その精巧な模写にとどまらず、山岸氏ならではの硬質な線によって昇華された新たな魅力に満ちています。それは、山岸氏自身が幼少からバレエを学ばれ、数々の舞台を鑑賞されてきたことに由来する説得力に根差すものでしょう。

本展では、株式会社KADOKAWAと江東区森下文化センターの協力のもと、山岸凉子氏のバレエ・マンガ(複写パネル)を軸に、薄井憲二バレエ・コレクションの歴史的資料を照らし合わせてご覧いただけます。華麗なる競演、どうぞお楽しみください。

Hyogo Performing Arts Center

山岸涼子氏の言葉

「アラベスク」は技法の解説なども細かく、また「キャラクターダンサー」という概念を打ち出すなど、本当に衝撃的でした。何か参考になさっている資料などはあったのでしょうか。——あの当時は全然資料がなくて。劇場のプログラムが一番参考になりました。プログラムに色々解説されているんですよ。薄井憲二先生などがものすごく専門的なことを書いてくださっていたんです。

ノンナのあのシーンの演目はなぜ「ラ・シルフィード」だったのでしょうか。(中略)

——タリオーニのあの「ラ・シルフィード」の衣装が素敵じゃないですか。連載の頃はあの衣装で踊る人は誰もいなかったんです。ソビエト時代は、バレエを派手な衣装で見せるのは邪道といわれて、使われていなかったんです。使われないとわかっていて、でもマンガでは絵になるから、私はあれで踊らせてみたいと思ったんです。あれを描いた少しあとに、オペラ座かどこかで復活させたと知ったのでびっくりしました。

(「山岸涼子インタビュー」バレエは憧れではなく、マンガより前の私の表現手段でした」/
インタビュー-藤本由香里 構成-ヤマダモコ/
『バレエ・マンガ〜永遠なる美しさ〜』京都国際マンガミュージアム編/太田出版/2013年/p.70-74)

薄井憲二氏の言葉

——ロマンティック・バレエ期の石版画(中略)バレエ史の研究に大きく役に立ちます。例えば、ロマンティック・バレエの時代は、焦点は主演者であるバレリーナだけでしたから、背景も何もない場所に、衣装を着た踊り手が、比較的簡単なポーズで立っているだけの版画が非常に多いのです。主演者の様子はわかりますが、作品の内容を知ることができません。しかし、中には、背景を描きこんでいるものもあります。それでも、それが実際に舞台上で使われた装置とは限りません。ロマンティック・バレエでは妖精が主役の作品が人気でしたから、それらしい雰囲気を描きこんでいるものもあるのです。どれが実際の舞台を表しているか、どれがバレリーナの美しさを強調するだけのものか、見極めていただくのも、研究者にとっては重要なポイントになるでしょう。

(「薄井憲二バレエコレクション目録第3巻刊行に際して」/
兵庫県立芸術文化センター薄井憲二バレエコレクション目録 第3巻 アンティークプリント・手紙・サイン・切手他」/
総監修-薄井憲二 監修-芳賀直子/兵庫県・兵庫県立芸術文化センター/2014年/p.4)

バレエ・マンガ「ヴァイリ」より 『ジゼル』

——バレエ団を経営する43歳の東山礼奈は、IT社長をバトロンに得て、精神的にも経済的にも充実するが、ある落とし穴が……。山岸が得意とするホラーものの要素も取り入れた作品。ヴァイリとは、ロマンティック・バレエ時代の代表作『ジゼル』に登場する結婚直前に亡くなった女性の精霊のこと。



©山岸涼子/KADOKAWA

『ジゼル』

- [初演] 1841年6月28日 パリ・オペラ座(フランス)
- [音楽] アドルフ・アダン
- [振付] ジャン・コラーリ、ジュール・ペロー
- [主演] カルロッタ・グリジ

バレエ・マンガ「アラベスク」より 『ラ・シルフィード』

——共産体制下のソビエト連邦で、地方のバレエ学校で劣等生だった16歳の少女ノンナ・ベトロワが、偶然出会ったソビエトバレエ界のホープ、ユーリ・ミロノフに見出され、才能を開花させていく物語。連載当初は3回で終わる予定だったが、第一回目の人気投票で1位を獲得し、長期連載に発展したという。少女マンガの革新的な一作。



©山岸涼子/KADOKAWA

『ラ・シルフィード』

- [初演] 1832年3月12日 パリ・オペラ座(フランス)
- [音楽] ジャン＝マドレーヌ・シュネゾフエール
- [振付] フィリッポ・タリオーニ
- [主演] マリー・タリオーニ

バレエ・マンガ「牧神の午後」より 『薔薇の精』

——20世紀初頭、バレエ・リュス(マンガの中ではロシア・バレエ団)の創立期に関わった天才バレエダンサー、ワツラフ・ニジンスキーの悲劇の生涯を描く物語。実際の考証に基づきながらも、山岸ならではの解釈で妖艶で超人的なニジンスキーが見事に描かれている。



©山岸涼子/KADOKAWA

『薔薇の精』

- [初演] 1911年4月19日 モンテカルロ歌劇場(モナコ)
- [音楽] カール・マリア・フォン・ウェーバー(『舞踏への勧誘』1819年)
- [振付] ミハイル・フォーキン
- [主演] ワツラフ・ニジンスキー、タマラ・カルザヴィナ

